

# 令和元年度第2回清掃審議会

## 会議録

令和元年5月21日（火）午後2時開会

会場 新潟市役所本館3階 対策室1

# 令和元年度 第2回清掃審議会会議録

日時 令和元年5月21日（火）

午後2時から

会場 新潟市役所本館3階 対策室1

- 出席委員 山賀会長、中澤副会長、西條委員、住吉委員、関谷委員、西海委員、阿部委員、井下田委員、石本委員、小林委員、鈴木委員、鶴巻委員、渡部委員
- 欠席委員 星島委員、石井委員
- 事務局 鈴木循環社会推進課長、塚本廃棄物対策課長 ほか

## 1. 開会

- 松本循環社会推進課長補佐（開会挨拶・資料の確認）

## 2. 議事

### ■議題（1）新潟市一般廃棄物処理基本計画の改定について（審議）

#### 次期「新潟市一般廃棄物処理基本計画」の基本的事項について 事務局説明

- 山賀会長：議題（1）新潟市一般廃棄物処理基本計画の改定についてです。前回までの審議会で、これまでの経過や実績等について事務局から説明がありました。今回から本格的な審議に入ります。委員それぞれのお立場からのご意見をふまえ、新潟市一般廃棄物処理基本計画が完成します。今回の審議会は、基本理念や基本方針などの全体の考え方にあたる部分であり、ここだけを検討してもまとまらないと思います。本日は、様々なご意見をいただいてポイントを整理していくような形にし、事務局でまとめ計画案を作ってください流れにしますので、ご了承くださいと思います。

次期「新潟市一般廃棄物処理基本計画」の基本的事項について、事務局から説明をお願いします。

- 鈴木循環社会推進課長：次期「新潟市一般廃棄物処理基本計画」の基本的事項について資料1をご覧ください。計画検討にあたっての方向性ですが、現計画の期間は8年間でしたが、次期計画では令和11（2029）年度までの10年間と考えております。上位計画である環境基本法、循環型社会形成推進基本計画、廃棄物処理法基本方針、さらには新潟市総合計画、新潟市環境基本計画といった上位計画に基づき、関連性を持って次期一般廃棄物処理基本計画を策定したいと考えております。

次に、資源循環都市のイメージを記載しています。リデュース、リユース、リサイクルの3R（スリーアール）を推進しながら、焼却施設ではごみをただ燃やすのではなく、エネルギーを作っていくサーマルリサイクルの観点のもとで進めていきたいと思っております。また、少し難しい面がありますが、再生利用（マテリアルリサイクル）していくことも観点において計画の全体像を作っていくしたいと思います。

次に、1 基本理念、2 数値目標、3 基本方針について、現計画の内容を記載しています。委員の皆さまからご意見をいただき、次期計画の基本理念、基本目標、基本方針を決定していきます。議論は多岐に及ぶと思いますので、資料のイメージ図を見ていただき、委員の皆さまからお考えいただきながら、議論を進めていければと思います。

会長からご発言がありましたとおり、本日はご意見を出していただき、最終的に事務局でお預かりします。次回の審議会で、事務局案を提示させていただきますのでよろしくお願いします。

**資料1 参考資料**は、事前に委員の皆さまからいただきましたご意見などを事務局で整理した資料です。

以上で、説明を終わります。

## ■議題（1）新潟市一般廃棄物処理基本計画の改定について（審議）

### 次期「新潟市一般廃棄物処理基本計画」の基本的事項について 質疑・応答

- 山賀会長：ただいま、ご説明いただいたことについての質問やご意見等がありますか。

<意見等なし>

- 山賀会長：ここからは、事務局から説明のありました基本理念、数値目標、基本方針、その他関連することにつきまして、委員の皆さまから順番にご意見をお伺いしたいと思います。また、**資料1 参考資料**に、事前に提出いただいたご意見を整理していただきました。配付資料を前提にし、意見を提出いただいた方は補足や追加があればご発言いただけます。また、提出されていなくても、ご発言がある方にもお話しいただきたいと思います。時間も限られていますので、できるだけ簡潔にご意見をいただければと思います。

では、まず基本理念について皆さまからご意見を頂きます。資料に記載のとおりという場合は、その旨をご発言ください。

- 西條委員：基本理念は、現計画のままで基本的に良いと思います。しかし、現計画にある「協働」という言葉が、人によってはイメージがつかみにくいので「市民・事業者・市がともに行動し、ともに作る」というように、分かりやすい表現にしたら良いのではないかと考えました。
- 住吉委員：基本的には、資料をお読みいただければと思います。一点目は「先進」が非常に前に行く高い目標という点、二点目は「協働」と「ともにつくる」の意味が二重になっている点、三点目は「循環型社会」という言葉を入れたほうが良いのではないかという点です。
- 阿部委員：基本理念については空欄で提出させていただきました。冒頭に、鈴木課長からお話がありましたが、数値目標や基本方針などの議論を進める中で表現の変更もあるということで空欄にしております。基本的には、現計画の内容で良いと思います。
- 井下田委員：現計画のままで良いと思いました。
- 小林委員：資料に記載のとおりです。日本のごみ問題に危機感を感じていましたので、言葉は言い換えることもできるかもしれませんが、基本理念はこれで良いと思います。
- 鈴木委員：循環型社会のイメージをもう少しはっきりと打ち出せたら良いと思いました。
- 鶴巻委員：このままで良いと思います。
- 中澤委員：住吉委員のご発言のとおり、基本理念は現計画の文言で良いのですが、「ともにつく

る」は意味が重なるので削除したら良いと思います。

- 関谷委員：基本は現計画で良いと思います。確認ですが、「環境先進都市」という言葉は、すでに確立された言葉ですか。要するに先進という意味がどこにあるのか、これはごみ問題に関する新潟のブランディングにつながる循環型社会を、最終的にどのように着地させるかという大事な部分だと思います。先進という言葉が具体的にどういうことなのかが、後の議論につながってくるという意味で、すでに決まっているからこの言葉を使ったということであれば、先進という言葉をもどのように捉えるかというのが問題と思い、確認したいと思います。
- 西海委員：基本理念は少し変えたほうが良いと思います。理由としましては、関谷委員のご指摘のとおり、現計画の「環境先進都市」や「協働」という言葉は、上から目線で官僚的だと思います。「循環社会」というと難しいかもしれませんが、資源の循環という言葉を使う、もしくは廃棄物の低減などのように具体的な言葉を少し入れるのはいかがでしょうか。私も、地域創生に関わっていることもあります。住み続けられるようなまちづくりという考え方をしていくと、若者がさらに新潟市へ住むというイメージも考えて、柔らかい感じの基本理念にできれば良いのかと思います。ただし、基本方針や数値目標とも密接に関わりますので、基本理念などの言葉は今後の議論で決めていけば良いと思います。
- 石本委員：一般廃棄物処理基本計画に、「環境先進都市」という全体的な言葉を使っているかが疑問でした。循環型社会を目指すのであれば、そのような言葉をストレートに使えば良いと思います。環境基本計画であれば「環境先進都市」という言葉が入っていても良いと思いますが、廃棄物処理基本計画に沿った言葉で合わせたほうが、理念としてよりふさわしいというところです。循環型社会という言葉を使うのかどうかというテーマとしてはずれますが、国では「地域循環共生圏」という言葉を使っているのです。そのような言葉などに合わせていくということも大事ではないかと感じました。
- 渡部委員：皆さまの意見と同じです。
- 山賀会長：事務局に確認したいという発言がありましたので、説明をお願いします。「環境先進都市」という言葉が確立しているのかも説明をお願いします。
- 鈴木循環社会推進課長：現計画は8年前に策定したものであり、ごみを処理するだけでなく、CO<sub>2</sub>の排出抑制・削減していくという大括りで環境という言葉を使ってきたと思います。「環境先進都市」を目指す取組みを進めてきた背景があると思います。その結果、現在がどのような立ち位置かと言いますと、新潟市よりも上位のいくつかの部門、項目は当然あると思います。委員の皆さまから非常に良い言葉をいただきました。ご意見でありました「循環社会」、前回の審議会に関谷委員からご発言のありました低炭素の社会を目指すという観点もあると思います。委員の皆さまから議論いただき、一般廃棄物処理基本計画を策定していく中で、「循環社会」はとても良い言葉だと思います。
- 山賀会長：本日は、委員の皆さまのご意見が多くいただけたと思います。ホワイトボードにポイントを書き出すようにしました。現計画のとおりで良いという委員も多いですが、もう少し柔らかく、分かりやすくしたほうが良いというご意見、国の施策や情勢を見据え「循環社会」という言葉を入れてはどうかという意見も出ました。現計画は8年前に策定され「環境先進都市」を掲げてきたものですが、策定した時期から少し変わっているところがあります。委員の皆さまからのご意見と、事務局から説明を踏まえ改めて委員の皆さまからのご意見があれば出していただきたいと

思います。

- 西條委員：自分自身の意見では出していなかったのですが、リサイクルやリデュースを考えると、「循環社会」という言葉はとても分かりやすいと思いました。
- 鈴木委員：現計画が策定された8年前には、ストローなどのプラスチック製品がマイクロプラスチックになって環境汚染につながるという考え方はなかったと思います。今後10年間に使える言葉を今から考えておくといいと思います。
- 関谷委員：先ほどの補足になります。なぜ、「先進」という言葉にこだわったかという、立ち位置の問題で、トップランナーになるという立ち位置から技術という問題につながると思います。全てを自治体が補てんする時代でなく、なぜこれからは循環させるかという、そこにお金が集まる、投資の機会になるということです。投資の機会とは、世の中自体が環境のマイナス問題に対し世界中が協力し解消していくという流れになっています。例えばESG投資や、ソーシャルインパクトボンド（SIB）のように、課題を達成したらそれに収益が配分され、儲かるから投資するということと、違う時代の流れが起こっているのです。当然ながら、「環境先進都市」を目指すのであれば、ごみが資源になりそれに取り組むことが地球にメリットがあるということで、多くの人々が関わるチャンスになるわけです。あえて、「環境先進都市」ということを発信するならば十分に新潟のブランドになると思う一方、「ごみ」という言葉はもうやめ「資源」という言葉に統一する、目標にする、あるいは新潟への投資の機会にすることを考えれば、戦略的にこのフレーズを検討いただきたいと思います
- 山賀会長：今までの発言にありますように、どちらかという今までマイナスイメージだった「ごみ」が、これからはどんどん前向きに、プラスに転換していくような社会になりつつあるという関谷委員のご発言でしたが、そのほうが市民も事業者も取り組みやすいという気がします。ここで言葉を押さえておくという形でもよろしいですか。「循環型社会」や「協働」についてももちろん必要ですが、上から目線のような、もう少し分かりやすいほうが良い、意味が二重になっている、分かりやすくしたほうが良いといったご意見がありました。表現を工夫していただくようなことで良いでしょうか。さらに、「低炭素」という言葉も先ほどいただきましたが、これにつきましてはご意見いかがでしょうか。
- 西海委員：「低炭素」という言葉は、さらに広い意味であると思います。それを理念などに掲げてしまうと、技術など様々なことが入ってきます。一般廃棄物処理基本計画では、新潟市という範囲を考えた言葉が良いと思います。私は今のところ、この言葉は少しよろしくないと思います。
- 中澤委員：関谷委員がご指摘された、「ごみ」が「資源」になるというキャッチフレーズをどういう言葉で表したらよいか考えつかないです。ただ「ごみ」が「資源」になるというのは大変分かりやすく親しみやすいので、どのように表現したらいいかを考えていただきたいと思います。
- 山賀会長：考え方については、皆さま共通のところもあると思います。今、ご意見いただいたような形でよろしいでしょうか。

<意見等なし>

- 山賀会長：「低炭素」は委員ご指摘のとおり、幅広いことでありますし、事務局で考えていただきたいと思います。以上で、基本理念についてはご意見をいただいたことにいたします。

続きまして、数値目標についてのご意見をいただきます。

- 西條委員：数値目標を、一市民としてみた場合に分かるようにするのが大切だと思います。例えば、1人1日あたりマイナス10グラムと目標に書かれても、どれくらいが10グラムなのかが分かりません。例えばひとつまみなのか、ふたつまみなのが分かりません。グラムで表示するよりも、1パーセント減らす、10パーセント減らすとしたほうが行動しやすいと思います。よって、グラム表示とパーセント表示を併記してはどうかと記載しました。

事業系ごみにつきましては、事業者にどこまで減量すればいいのかという根拠が分からないと行動しにくいと思いました。根拠を示し、データを提示することが大切だと思います。

また、何を考えて消費行動していくかを考えていかなければ、リサイクル率を上げることはできないと思います。市は市民にどこまで求めることができるか、最初に限界値を考えないと、数値目標は作りにくいと思いました。

最終処分量、処理能力も市としてどこまで求めるのか、なぜそれを求めるのかという理由をあわせて示さなければ、数値のみを出しても通らないのではないかと思います。

参考指標については、計画を読むのは市民なので、市民に説明、そして納得してもらえる材料を提示するのはいいと思います。しかし、提示だけをして、参考指標にならないと思いますので、納得してもらえる材料を出していただきたいと思います。

- 住吉委員：前回の審議会資料を参考に、政令市の計画を見比べて新潟市ではどこか項目を減らさないかと見ました。そこで、家庭系ごみと事業系ごみを一緒にした目標とするのはどうかと思いました。最終的な排出量で検討するため、その中で家庭系ごみ、事業系ごみを細かく見ていくことになるかと考えたところです。ですから、家庭系ごみ量は減少した、事業系ごみの量は増加したということが、合計で分かりにくくなると思います。いずれにしても、最終的な数値は出てきますが、全体としてどのようにしていくかを考えるのも一つだと思いました。つまり、一つひとつの数値目標にこだわり続けると、何が問題かが見えづらくなりますので、総排出量を見てはどうかと思いました。

- 阿部委員：基本的には、自分の身近な問題として書かせていただきました。食品の賞味期限、消費期限について聞かれると、なかなか明確に答えられない状況です。最近、物があふれていて、家庭でもまだ食べられるものを冷蔵庫に入れて忘れず。事業系の場合は、懇親会や宴会などは非常に多くの食品ロスが出ています。食品ロス発生量を把握し、市民全体に啓発しながら減らしていくのが身近な問題として気になりましたので、書かせていただきました。

- 井下田委員：家庭系ごみ量は、それぞれ目標が必要だと思いますので、数値目標は必要だと思います。しかし、何グラム減らしてください言われたとき、具体的に目に見える数字が良いと思います。例えば、ご飯ではお茶碗の4分の1杯分という具体的に見える形で示したほうが良いと思いました。事業系ごみについては、会社と言われるとどのような機構になっているのかもよく分からないところもあります。私たちは消費者としていろいろな物を買いますが、これは必要ないという物もたくさんあるわけです。そういうことを聞いたとき、ある事業者が、それを見ましようということで意見を汲み取ったら、売り上げが落ちたということを言われました。そうしたときに、同業種の中でできるだけ減らしていく相談をし、少しずつ減らしていただければ、私たち自身の廃棄量も減っていくのではないかと考えました。

リサイクル率は、現在中国などがプラスチックを輸入しなくなり、それが自然環境の破壊など

につながっているので、新潟市はどれくらいのプラスチックを輸出しているかを知りたいと思い書いてみました。

最終処分量は、相対的なものだと思いますので、私は廃棄する物を減らせれば少しずつ減っていくのではないかと考え、書きませんでした。

- 小林委員：どのような根拠で現計画の数値目標が示されているのかが疑問に思いました。そして、委員より発言があったとおり、例えば1人あたり 20 グラム減らすには、どのようなことにすれば20 グラム減るのかを図表化すると、分かりやすいと思います。事業系ごみについては、今週、ローソンやセブンイレブンが食品ロス減らす対策を実施するとニュースで出ていました。事業系ごみも、数値目標はどのくらいかを図表化すると分かりやすいと思います。
- 鈴木委員：数値目標については、現計画を策定した平成24年から8年後を考えた目標ですので、そのまま踏襲していれば良いと思います。目標を変えるのであれば、8年間の結果、できたもの、できなかったものを見直し、点検後に予算が必要な数字が発生すると思いますので、現状から10年後を見据えれば、良いと思います。
- 鶴巻委員：現計画の数値項目で良いと思います。鈴木委員がご発言されたとおり、前からの比較が分かれば、また励みになるかと思えます。
- 中澤委員：リサイクル率は、もっと目標を高く持っていていいと思います。家庭ごみは先ほど委員からご発言がありましたように、何パーセント減らすという表記にするなど、1人1日あたりではなく、もっと分かりやすく表現をすることで身近に感じるのではないかと思います。事業系は、食品ロス発生量が大変多いと感じています。私も事業のごみを出しますが、事業系の紙はなかなか減らせるものではないので、コピーした裏面を再使用するという感じです。最終処分量については、数字的に分からないところです。
- 関谷委員：全く違う観点からお話しします。筋道から考え、数値目標は上位計画や社会情勢を考慮した目標ということから考えると、循環型社会が理念の中核であるならば、CO<sub>2</sub>削減が最上位の目標でなければいけないわけです。具体的に数値は何かを考えていくと、結局は経済に連動してきてはじめて、企業であればそこにメリットがあると感じるし、生活者であればいろいろな意味でコスト負担が減るような形で協力しようとなるわけです。経済的視点を考えずに単純に目標を立てるのは、方法として非常にもったいないと思います。先ほどから戦略的という言葉を使っているように、「ごみ」を「資源」と読み替えた瞬間に明らかにチャンスとなります。世界中へ、新潟の取組をアピールできます。世の中は地球環境を守るために協力する一つの共通ワードとして、経済という視点から、地域課題に地域だけで取り組むのではなく、地球の問題として考えていくことが社会情勢・世界情勢となっています。そちらを意識せずに目標を立てるのは言葉遊びになると思います。
- 西海委員：数値目標は難しいものです。現在、四つの数値目標を挙げていますが、ターゲットを絞ることは、少し早いと思います。関谷委員がご発言されたように、国の目標値がいくつか、大きな形であると思います。その大きな形を新潟市がこの計画の中でクリアするためにどのようなものがあるかを見ないといけないということ、もう一つは、多くの委員がご発言しましたように、市民に分かりやすいということです。数値目標を決めてしまうと、一人歩きします。次期計画の数値目標を議論というよりは、ある程度は市で提案されたほうがよいと思います。現計画を見て議論しても関の山ですし小手先のものになってしまいますので、まずは保留したほうが良いと思

います。

- 石本委員：数値目標は立てなければいけないと思いますが、この四つで良いのかということも私も思っています。例えば、組成分析した結果、家庭系ごみは審議会の資料で生ごみと紙類が比重を占めており、減量が必要ということがありました。このことは指標化しなくても良いのかということで、総量だけでとらえて良いのか疑問に思いました。この後の説明や議論で、もう少し具体的なものが出てくるのかもしれませんが、これが最終的に達成すべきKGI（重要目標達成指標）なのだとしたら、その下にKPI（重要業績評価指標）などがどのように設計されていくのが大事とされていて、ここだけ見ても設計しにくいとっております。
- 渡部委員：3の基本方針のほうは個人的に数字が書かれてあっても、正直すぐに分かりません。10グラム減らそうといっても、少ない数字なので、そこまで減らさなくてもいいのかと思ってしまう。例えば、今までよりも半分減らさないといけないと言われたら、根本的にごみを減らす対策を家庭でも考えなければいけないと思います。しかし、数値が若干下がっているくらいでもそこまでイメージがわかりません。一般市民は3の基本方針で事細かに書いてあると、ようやくそこで実感がわいてくるのかなという感じがします。
- 山賀会長：数値目標につきましては現計画では四つありますが、目標数も含めて、項目そのものがこれで良いかということや、その根拠がどうかということ、数字の見せ方や関係性についてもご意見頂きました。頂いたご意見の中で、事務局でお答えするようなことがあれば、お答えください。
- 鈴木循環社会推進課長：委員からのご指摘もありましたが、都市像を決め、その都市像に向けた目標を立てながら計画を策定していくこととなりますが、議論は行ったり来たりということが起こってきます。先ほど、西海委員からご指摘いただきましたが、これから方針や施策を作る過程において、事務局である程度の目標の枠組みを提示し、皆さまに審議していただければと思いますので今回はそれぞれのお考えを頂戴できればと思っております。
- 山賀会長：関谷委員と西海委員は、今回の審議会で決めるのは早いというご意見でした。具体的に目標というものがあれば、お答えいただければと思います。
- 関谷委員：最近、1リットルのペットボトルの料金が20円上がったのをご存じだと思います。段ボールの値段が上がったから、料金が上がったということです。段ボールのコストがなぜ上がったかということ、米中の貿易摩擦で、中国が米国から回収していた古紙を日本から回収しなければならず、結果的に段ボールのコストが上がって、消費者にそのつけが来ているわけです。ここから考えると、ごみという廃棄物が、むしろ経済を動かす上流として非常に大きな影響力を持っているということです。これからは10年後を組み立てていかないと、結局、処理と考えた瞬間にコストをかけなければ良いということで、総量としてのごみを減らせばコストが減るという考え方は、まさに時代錯誤と言って良いと思います。そう考えたときに、ごみを削減するというのは、自治体あるいは経済という側面よりも、消費者のライフスタイルの中で啓発していくうえで、目標としては大変よいのですが、資源と考えると、ごみを減らさなくても、むしろ分別の方法であったり、分別するための技術であったり、取組自体が世界から見れば関心の的になって、そこからいろいろな形で、波及効果が期待できます。数値目標は有識者として言わせていただくと国がいろいろ設定しなければいけない、事情があると思うのですが、そのことについて考えないと、10年後の新潟市は、先進どころか後進になることは目に見えているので、そこは絶対に押さえて



いただきたいと思います。

- 西海委員：関谷委員ご指摘のとおりだと思います。基本的に今回大きなキーワードで「循環」や「サステイナブル」、「持続」というキーワードが出てくると思います。ただ、問題はどの辺のエリアで持続を考えるのか。おそらく新潟市は新潟市内で考えれば良いのかと、という気もするのですが、関谷委員と少し違うかもしれないですが、経済、資源化に持っていくということは非常に大事な動きです。以前からもこのような動きが出ていると思うのですが、資源になるものをどうやって回していくかということも一つの大事なことです。

もう一つは、ごみの総量を減らすという言い方はおかしいのですが、どこまでをごみかということもあります。例えば、最終的に焼却するものをごみと言うのであれば、それが減少すればそれはそれなりに良いと思います。新潟市で循環させていく、もしくは持続的に外に、中国の場合、実は一つ問題があって、やはり内輸でできないところがあって、それは外に持って行って、そこで経済活動をやるという考え方です。私は農学部ですので、できるだけ内でやるという考え方にあるのですが、コストがかかってしまうところもあります。どのように考えていくかは、新潟市の中で考えれば良いと思うのですが、基本的には「循環」や「サステイナブル」、「持続」という言葉と、おそらく今度のキーワードとしてはそれに関係のある具体的な例としては食品ロスだと思っています。その辺を上手に使うような数値が必要なのかなというイメージがあります。ただし、具体的にはなかなか難しいと思います。

- 西條委員：先ほど理念で環境先進都市とはという話がありました。環境先進都市は外から見た新潟市の頑張っているところですね。循環はごみのすごく身近な問題になります。現計画も環境先進都市に向けた数値目標とありますので、これは外から目線で何を指すかという話で目標を立てていますが、そもそも次の計画で理念を外から見て素晴らしいという先進都市を目指すのか、それとも循環するののかというどちらを選ぶかで、この目標値も変わってきます。まず、理念をきちんと決めて、その理念だったらこれが望ましいと市の側から出してもらわないと、数値目標を決めるというのは進んでいけないという気がしました。
- 山賀会長：項目自体がこれで良いかということと、根拠や見せ方へのご意見でした。今、委員からご発言があったように、目標の設定というのは難しいかと思います。食品ロスも問題になっておりますし、また市民にとって分かりやすい目標設定が見えないと、なかなかその取り組みも進まないという気もしています。ただ、これは難しい問題であり、ご意見が多く出てきましたが、これをふまえて市にお考えいただいたもので検討するということでもよろしいでしょうか。
- 鈴木循環社会推進課長：先ほどの理念同様に、本日はご意見いただくことを考えております。いずれにしても、この計画のターゲットはだれかといったところがあるかと思います。市民、事業者の皆さまと一緒に取り組んでいただくところもありますので、そこを考慮したうえで、次回の審議会で形にできればと思います。
- 山賀会長：次回以降に事務局から案を出していただくことにします。皆さま、ご意見ありがとうございました。

続きまして、基本方針に入ります。ご意見いただいた方から、補足等をお話してください。

- 中澤委員：基本方針は書きませんでした。ほかの委員のご意見をお聞きしたいと思います。
- 鶴巻委員：この基本方針が良いとは思っています。しかし、3Rの生ごみ減量の推進となっているのですが、私自身が3Rについて分かりません。リサイクルとリユースは大体分かると思うの

ですが、リデュースと、新しく出てきているリフューズという言葉は、外国語だと高齢者の方にはなおさら分からないと思うので、もう少し分かりやすい言葉で表現できれば良いと思いました。

- 鈴木委員：今まで3Rの推進を中心にやってきたということなのですが、資料で2R、4Rと書いている自治体が非常に増えていたものですから、実際のところ、3Rではごみの減量にならないということです。2Rですと、完全にごみの減量につながるので、2Rが良いと思います。
- 小林委員：以前から自分で個人的に調べて、ごみ減量の成功例や日本の市を調べたときに出てきたことを書きました。個人的には、行政の税金内でできることは限界があると思うので、私は事業者責任による回収制度を取り入れることが重要だと思います。ドイツや韓国も行っているのですが、事業者にも協力していただいたことが良いと思います。また、今、新潟市は燃やすごみは週3回の収集ですが、私は以前週2回収集の地域に住んでいました。収集回数が少ないことでごみを減らそうという個人的な意識も高まるため、週2回にしても良いのではないかと思いました。4Rのリフューズというのは、3Rより最初になると思うのですが、不要なものはいらぬということ、個人的に努めていただけたらと思いました。
- 井下田委員：ごみ減量政策で行動するのは市民ですが、市民へのPRが足りないと思いました。また、今は高齢化が急速に進んでいますが、あまり外国語を多用しないほうが良いと思います。ですから、3R運動は、「もったいない運動」など、もっと分かりやすい言葉に変えたほうが良いと思いました。
- 阿部委員：数値目標にも同じようなことを書いてあるのですが、食品ロスの削減ということで、新潟市も小学生への啓発など様々に取り組んでいるということで聞いておりますが、さらに幼稚園や保育園の年長のころから参加型の環境教育をしていくことが、ひいては家庭系の食品ロスの削減につながっていくのではないかとということで、一項目をあげさせていただきました。
- 住吉委員：家庭、事業、システムというように三つに大きく分けて考えていくのはどうだろうと思いました。例えば、基本方針1の家庭系ごみと、きれいなまちという地域一つに考えて一つの計画とする、事業は事業、そして基本方針4というのは、やはり一つ必要と思います。システム構築、体制、循環型社会構築となると、やはり体制が大事なので、それはそれで一つ必要と思いました。今は、基本方針が四つに分けかれています、大きく同じようなことをするのであれば、三つに分けるのはどうかという意味で書きました。
- 西條委員：以前の審議会資料を見ていると、例えば基本方針1家庭系ごみを減らす3R運動推進と三者協働については、様々な施策について書いてありますが、行政でできることは何かと思ったときに、子供のころからごみの減量について考えてもらうことだと思いました。遊びながらごみについて考える教育や、高齢者のごみ出し困難者の支援など、すでに地域の取組を支援していますが、三者協働とは言いながらもやはり行政がリーダーシップを取っていかないと進まないと思います。自主的に何かしてくださいと言っても、なかなか難しいでしょうし、モデルケースがないとできないことが基本方針1に入ってくると思います。ただ方針を示すのではなくて、市がリーダーシップを取ることが伝わるような取組があっても良いのではないかと思いました。

また、基本方針2事業系ごみの排出抑制と資源化の推進については単に資源として回収するとか、減らしてもらうというだけで良いのだろうかと思いました。県央地域では工場が出た端っこの材木、廃材を使ってインテリアなどを作っています。新潟市でも利活用という取組があっても

良いと思います。ただ、資源に分別してリサイクルするのではなくて、利活用するような事業を新たに入れても良いのではないかと思いました。基本方針3違反ごみ対策ときれいなまちづくりについては、違反ごみ対策ときれいなまちづくりという言葉が、乖離していると思いました。ごみ対策というごみ集積場を思いつくのですが、きれいなまちづくりは、少し広いことをイメージします。イメージが違うものを一緒にしているというのはどうなのだろうと思いました。きれいなまちづくりではなく、環境美化のほうが、ぼい捨て禁止のように遠いイメージになりません。基本理念に戻り、もう少し区分けした言葉の使い方というのがあっても良いと思いました。

基本方針4の収集・処理体制の整備ですが、公衆衛生という点の根幹なので、市民に対しては十分に、収集処理能力を告知してもらいたいと思います。また、大規模災害に備えた事前の体制整備では、事前にシミュレーションがないとなかなかうまくいかないの、平常時から市民の方にも協力というか、告知をしてシミュレーションをするような具体的な方針が入っても良いのではないかと思いました。

- 渡部委員：基本方針1の情報提供の充実と資源の分別促進は、個人的には連動しているように思いました。そもそもごみをどう分別すればよいのか、プラスチック製品はプラマーク容器包装なのか、燃やすごみなのか分からないということでした。ホームページを見ると、分別方法が出ているということですが、見るという、ワンクッション置くのが面倒です。結局、燃やすごみと一緒にいいと、燃やすごみに入れてしまう市民の方は多いみたいです。よって、このごみがどのごみに分別されるのかという情報提供が意外と市民には浸透していないということです。浸透するとそれがより分別の強化につながるのではないかと考えています。

高齢者、転入者などへの対応は、うまい題名が思いつかないのですが、連動するような表記でもいいのかと思います。情報提供の充実と資源の分別促進が連携するような書き方でも良いのかと思いました。

- 石本委員：方向性として、国の課題には、食品ロス削減、プラスチックごみ排出抑制などありますので、このあたりも打ち出していったら良いのではないかと思います。例えば、食品ロス削減は、先ほどから削減する方向の話は出ていましたが、食品ロス削減推進法の中でフードバンクへの協力は、市の努力義務だと思いましたが、単に抑制ではなく、どうやって循環させていくのか、再利用していくのかという観点の部分も方針に入れていただくと良いのかと思います。
- 西海委員：基本方針は新潟市としてやることでしたか。それとも新潟市民もやることでしたか。
- 鈴木循環社会推進課長：市民、事業者、市の三者です。
- 西海委員：分からなかったのは、現在の基本方針の1と2というのは対象を区分しているだけですね。一般市民向けが基本方針1で、企業向けが基本方針2ということで、それぞれがやっていることはもちろん違うのですが、もう少し違った分け方ができないのかと思いました。基本方針3は、環境づくり、もしくは教育もここに入ってくると思いました。要するに「きれいなまちづくり」でもいいですし、「住みやすいまちづくり」でもいいのですが、基本方針4は、そのために新潟市がやるべき体制整備とか、そのようなことも入ってくるということで、何かこれは全体的に対象をいくつか分けているようなイメージがありました。

基本理念に関係してくると思いますが、理念を達成するために四つの方針がありますが、この数を減らしたほうが良いとご発言する委員もいらっしゃいました。見やすくしようとし、10個になっても良いということです。今回の資料を頂いて私が回答をしなかったのは、ディスカッショ

ンをいろいろした中で理念や目標、方針が出てくると思ったからです。他市の基本方針なども、もっと分かりやすいと思うのです。例えば、ごみの減量をやりましょうという中で家庭系と事業系に分けてもかまわないと思います。また、環境を作りましょう、環境美化、もしくは循環型社会の実現のための教育をやりましょうという形で持っていったほうが、もう少し分かりやすくなるのかなと思います。

- 関谷委員：基本方針は、ある意味、ごみ関係の全体の事業をどのように分類していくかという事業区分につながってくると思います。もう一つどうやって実現するかという中で、先ほど質問があったように決して行政だけがやるわけでもなく、市民も、あるいは企業も協働してやるということが前提です。そう考えてみたときに、それぞれのステークホルダーに刺さるキーワードは何かといいますとやはり経済だと思うのです。どんなに分かりやすい言葉を書いたとしても、市民がそれを実行に移すかという、三者にメリットがないと、現実的に動かないと思うのです。いずれにせよ、経済的なことを考えつつ、それをどのように行政予算を区分していくかという中で、この方針があると認識するわけです。その中でどうやって区分するかという考え方として、循環型社会ということを考えるなら、時間軸で区分していくのが普通だと思うのです。どのように循環していくのかというプロセスによって、それに該当する一つの方向性というものを決めるやり方が一つです。もう一つは、循環型社会というものを空間的にとらえる考え方で、全体のごみを処理するためにどういう施設、機能が必要かと考えた中で、ゾーニングして区分していくとか、線引きの考え方が分かりません。理念が空を浮いている印象を拭えないので、混乱を招くことは分かっているのですが、その辺を考えたほうが、世界から見られてどうかという視点が 10 年のスパンで考えたら大事です。なぜならば資源だからです。方針も基本のごみと考えるから減らすということが正になるわけで、有効だという決めつけの中で分類されているのは大変違和感がありますし、そこをどう考えるかということが大事だと思います。
- 山賀会長：具体策のところにかかわる部分も含めてご意見を頂きましたので、具体策をふまえての方針設定になると思います。現計画での方針が 8 年前に作られたものであり、それから今と将来に向けて、大きく考え直さないといけないということが浮かび上がってきたかと思います。これからの社会情勢、市民にとっての分かりやすさ、取り組むインセンティブ、取り組みやすさを促すような設定、表現なども含めて必要なかと思っています。今までのご意見をふまえて、さらにご発言があるようでしたら、ぜひお願いいたします。
- 石本委員：「一般廃棄物処理基本計画」という名前が、ネックになっているのではないかと話を聞いて思いました。先ほどの話からまとめると「新潟市循環型社会形成基本計画」みたいな話になってきているので、可能であれば、そのような名前はいかがでしょう。
- 山賀会長：今までですと「廃棄物」という考え方でしたが、これからそれが「資源」という転換の時期になってきているという皆さまのご意見だったと思います。事務局で何かありますか。
- 鈴木循環社会推進課長：委員ご指摘のとおり、一般廃棄物処理基本計画は作らなければいけないものですが、名称は他の都市でも様々に変えているところがあります。関谷委員のご発言でありました、経済観点からというのは、非常に分かりやすい視点だと思います。石本委員のご指摘のとおり、KGI、KPI は行政が一番苦手なところですが、そう言いながらも、市民の皆さまに分かりやすい、お伝えしやすい、理解しやすいということであれば活かしていきたいです。また、戦略の中に戦術があると思うので、これから施策、何をしていくのかという戦術のところ

を作る中で、重ねてですが行ったり来たりの進め方になろうかと思いますが、基本理念、数値目標、基本方針、そして施策を、こちらのたたき台をもとに進めていければと思います。本来であれば、計画づくりのとき、事務局側が案を提案するやり方は多いと思うのですが、本日は、西海委員のご指摘のとおり、ディスカッションで、皆さまから意見をいただいたうえで組み立てていく場にさせていただきました。

- 山賀会長：様々なご意見が出ました。現計画の基本方針は四つですが、組み直すような形になるのではないかと考えております。こちらも、今の頂いた意見ということで、次回以降案を出していただき、それを議論するという形にします。

その他ということでご意見も頂いております。今までの基本理念、数値目標、基本方針以外でこの計画についてのご意見や、今までの議論、思いついたことなどあれば、この時間内でお話してください。

- 鶴巻委員：3Rの言葉についてももう少し分かりやすいキャッチフレーズのような言葉で言っていると、分かりやすいと思います。また、生ごみ堆肥化については、昨年、市の食育推進のメンバーに入っていて、そちらで勉強させてもらったときに、九州から先生がいらっしゃって、野菜類の廃棄物を堆肥化することは良いということを知りましたが、私自身住宅地に住んでいますので、廃棄物を堆肥化することは少し難しいと思いました。

また、新潟県の他市町村に住む姉は、分別のときに生ごみと燃えるごみを細かく分別しています。面倒くさいと言うのを聞いたのですが、現在その言葉も出ずきちんとやっているのも、もし現実になったら面倒くさいという話が出るかもしれませんが、そういうところで削減できるならばやっても良いのかなと思っています。

もう一つは、学校の食材などを分別して集積しているという話も聞きましたが、北区では、調理室を使わせていただいたとき牛乳パックのような紙類なども生ごみと一緒にごみに出しているのです。分別したほうが良いならば、市のほうから分別してくださいと、改めて言ってもらえることも良いのかと感じたもので、ここに記載させていただきました。

- 鈴木委員：本日の意見を聞きますと、一般廃棄物処理基本計画は廃棄物を減らすことが目的なのか、循環社会を作ることが目的なのか、私の頭の中で混乱しているような状況です。
- 小林委員：日本のほかの政令市で成功例を調べていきましたら、名古屋市は2年間に20パーセントもごみ処理量を減らすことに成功したという都市ですので、関心を持って書いてみました。そして、名古屋市民の強い責任感によって分別文化が定着したと聞いています。知人が名古屋に住んでおり、様々なことをやってきたことなどを聞いたことがあります。

これも一例で書いただけで、実際に新潟市に当てはめられるかといえば、大変難しい問題だと思いますので、これから市の方に頑張っていたきたいと思っている次第です。

- 阿部委員：私は農業団体の職員ですので、農家の立場ということで書かせていただきました。今ほどお話がありましたが、循環型、サステナブル、持続可能ということで、農業のみ殻や稲わらなど、バイオマス資源になるものがたくさん出ますが、田園型政令指定都市という、都市像を持っている新潟市では、そういうものを積極的に利用する施策を、新潟市を挙げて取り組んでいただきたいと思います。今も取り組んでいることは承知しておりますが、少し熱が冷めてきているのかと感じますので、今日の議論とは違うかもしれませんが、ぜひ取り組んでほしいと思います。

- 西條委員：自分が家で捨てるごみ箱の中身から、低炭素、世界へ、次の時代へなど、様々なことを考えなくてはいけないのが廃棄物の問題なのだなど、改めて痛感しました。子供たちに小さいうちから廃棄物について、楽しみながら考えて、学んで、行動する機会をぜひ作ってもらいたいと思います。そうでなければ間に合わない問題だと考えました。それとともに、新潟市では、このゴールデンウィーク中もきちんとごみの回収がありました。ごみ袋の有料化で市民からお金をもらっているからということなのかもしれませんが、ここにかかわっていただいている皆さまの労に報いるように行動しなくてはいけないのだなど、一般市民としても思いました。
- 中澤委員：本日の様々な話しからごみが資源になると大変良いと思いました。全く真逆の発想で、これを良い方向に持っていかれたらと思いました。
- 井下田委員：今までごみは、減らすことだけを考えており、そちらのほうが良いと思っておりましたが、関谷委員が経済のことを含めて発言なさったということは、私とは真逆の発想のことでしたので大変驚きました。
- 住吉委員：基本理念がどちらの方向に向いたかが、分からずにいます。例えば、循環型社会をどう作るというところで、先進都市でさらに力をいれてやっていこうという前回のものではなく、地に足をついてやっていこうにしたのか、あるいは一歩進んだ新たなものを作っていこうになったのか、そのあたりの基本理念の落としどころがはっきり決まっていなかったもので、基本方針を話し合っても、どちら方向に行くのかと、今の段階で市の方の宿題が大きいと思っているところです。
- 渡部委員：清掃審議会に参加している人は、ごみに関心があって参加している方が全員だと思うのですが、一般の人は今後、この計画書を作って完成したときに、見る人は見るし、見ない人は関心すらないというように分かれると思うのです。関心がない、意識がない人にも、見てもらえるような、分かりやすい内容というのがまず前提になればいけないと思いました。先ほど、新潟市一般廃棄物処理基本計画という題名を変えることもできるというお話があったのですが、全部漢字で書かれているため見たいとは思いません。「ごみを資源に変えよう計画」などひらがなも使って市民の皆さまから興味をもってもらえるような、題名と内容にしたいと思いました。
- 石本委員：持続可能な社会というところが、何人かの委員の方からもキーワードとして出てきましたが、そこは外してはいけないと思いました。これは新潟市だけではなくて、日本国内や世界の中でも共通していることです。前回の審議会でも発言しましたが、SDGsがキーワードになってきていますので、取り込んでいったほうが良いと思います。次期計画の最終年はちょうどSDGsの達成最終年の前年です。2029年为目标ということであれば、なおさら持続可能な社会にどうつなげていくのかという観点を外してはいけないと思います。そのようなときのキーワードの一つが、一番はじめに発言した「地域循環共生圏」という話で、環境省が第5次環境基本計画の中で入れた言葉ですが、その中でエネルギーだけの話しではなく、農山漁村部とかだと、食品廃棄物などをどうやってリサイクルで循環させていくのかという話しですし、都市部だとプラスチックや、そういった部分をどうリサイクルしていくのかという話しです。さらにそれを資源として、どうやって経済を回していくのかという部分まで、その発想の概念の中に含まれていたりしますので、あくまで一般廃棄物処理基本計画なのだとなるとそこは入れられないかもしれません。ですが、関谷委員からも資源としてどうやって経済を回していくのかという観点の話が出たので、ぜひそちらを盛り込んでいただくと、より環境先進都市という言葉が浮つかないようにな

るのではないかと感じています。

- 西海委員：環境基本計画が新潟市にもあるので環境基本計画にあまり抵触しない形で内容を変えるということをぜひ検討していただきたいと思っています。
- 関谷委員：一番大事なポイントが、ごみか資源かということがスタートだと思っています。ごみを減らすのは確かに良いように思えるのですが、これは徹底したら、経済の市場をシュリンクさせることになって、税収が減って、さらに暗い未来を呼び込むという話なのです。資源といった瞬間に、実は行政が担うべき部分のスリム化ができるのです。民間企業とタイアップして、投資という形で外部経済を呼び込んで、そこから得られたリターンを市民に還元すれば良いわけですから、循環型社会は一つの考え方だというように思うのです。よって、資源かごみかという問題は非常に大事ですし、多くの人たちを巻き込むうえでは、言葉でなびいてくれるのは現実的ではありません。何らかの形でリターンがある一つの効果を考えなければ、協働して循環していくという流れは生まれません。そのために資源からいろいろなテクノロジーや、外部的な資金を集め、新潟の企業だけではなく、その技術を持った人たちも参画してもらうことです。結果的に地球環境にとって良いということで、諸外国から尊敬されて、観光という形でその場所に行ってみたいというようなインバウンドにつながる、広い意識を持っていただくことが、資源という言葉にした瞬間、新潟の中に描けるビジョンなのではないかと思っています。
- 山賀会長：本日は基本理念と数値目標と基本方針以外にも良いご意見を頂きました。ここまでの議論の中で、循環社会、持続可能な社会が、大きなキーワードになってきました。ごみではなくて、資源として考えるというようなことも出てきました。実現する、行動を促すために分かりやすさをもっと出していくというご意見も出ています。基本理念のところで環境先進都市という立ち位置として、関谷委員から「新潟ブランド」というようなブランド化というお話や、小林委員から「新潟スタイル」という言葉が出てきたように、やはり新潟市としてどうしていくかというところが、今後もキーワードになっていくかと思っています。  
皆さまから非常によい意見を頂いたと思っております。それでは、資料1に関しましては、ここで終わります。

## ■議題（１）新潟市一般廃棄物処理基本計画の改定について（審議）

### 一般廃棄物処理施設（焼却施設）のあり方について 事務局説明

- 山賀会長：「一般廃棄物処理施設の処理体制の構築（焼却）」について事務局から説明をお願いします。
- 鈴木循環社会推進課長：この件につきましては、前回の審議会で一通り説明しまして、若干ご意見を頂く時間もなく終えてしまいました。皆さまには唐突感があるかと思っています。基本方針4は、現在ある基本方針四つの中の4収集処理体制の処理体制、これからの施設のあり方を皆さまで共有したいということで、前回説明させていただきまして、さらにそれを深掘りしたものを再度、復習の意味も含めまして共有させていただければと思います。

新潟市は、平成17年に合併しまして、当初、焼却施設が6施設ありました。現在はそれぞれが統合されて、焼却施設は4施設になりました。現在稼働している4施設は西区の新田清掃センター、江南区の亀田清掃センター、西蒲区の鎧瀧クリーンセンター、北区の豊栄環境センターです。処理量がそれぞれ記載してありますが、大半が新田清掃センター、亀田清掃センターでまか

なっています。また、それにかかる経費ということで載せております。鎧澗清掃センターの金額が処理量に比べて大変高額ですが、処理方式が違いまして、非常に燃料がかかる炉であるということが原因で高額になっています。その代わり、出てくる灰は非常に少ないため、最終処分場の関係も含めて、それぞれ炉を選択して、現在に至ります。そして、余熱の利用状況であります、新田・亀田・鎧澗は、それぞれ発電の機能を持っており、新田はアクアパーク、そして亀田は田舟の里といった温浴施設の熱利用にも使っています。

また、現状の課題として、今後のごみ推移は人口減を考えると、2029年度には年間21万5,000トンになることを念頭に置いていただきまして、施設の稼働年数を見ると、全国では大体25年建て替え時期となっています。新潟市では亀田清掃センターは22年、鎧澗クリーンセンターは17年になっております。今後、そのような焼却施設をどのように考えていくかといいますと、2029年度年間21万5,000トン进行处理しようとする、1日あたり約800トン进行处理する能力の施設が必要ということを前提にしまして、その施設数をどう考えていくかの視点をあげています。まず、点検・故障による運転停止の危険性を回避するためには、一つだけよいのかということもありますし、まだまだ既存の施設として、年数を考えても使えるのかといったところの観点やランニングコスト、稼働コストを下げるうえでは数は適切なのかといったところがあります。そして、最後にCO<sub>2</sub>排出抑制を考えていくには、今ある4施設を2施設体制にし、稼働年数が7年の新田清掃センターと、新しい470トン相当の施設体制で望ましいのではないかと考えております。

次は参考になりますが、今あるごみ焼却場です。現在、焼却施設は全国的に見ますと、発電能力を非常に高く有する施設であります。更新施設で一日あたり470トン相当の施設を建設すると年間約2万3,000世帯の電力を生むことができます。さらには電気事業法の関係もありまして、作った電気を売却するにあたっては、市内の施設に循環させるという、電力の地産地消も考えます。

最後になりますが、発電だけではなく、災害が起きたときの施設自体が、停電が起きても、施設内の発電によって電源を生むことができますし、事前に燃料や資材、食料を備蓄しておいて避難所として活用もできるという防災拠点のような施設にしたいと思っています。さらには生んだ余熱ですが、今でも余熱の利用や、先ほど、皆さまから発言がありましたとおり、その施設自体で環境教育、学習ができるだろうといったような場にもなるという付加価値をご紹介します。冒頭申し上げましたが、ここで皆さまに、2施設が良いのか、3施設が良いのかというわけではありませんが、市としてはこういった方向性で考えているということをご共有いただき、皆さまからご理解、ご意見いただければと思います。

## ■議題（1）新潟市一般廃棄物処理基本計画の改定について（審議）

### 一般廃棄物処理施設（焼却施設）のあり方について 質疑・応答

- 山賀会長：ただいまの説明につきまして、ご質問やご意見等がありますか。
- 西條委員：更新施設という言葉がありますが、更新というのは、普通のイメージだといまあるものを更新するのですが、この場合は新しく作るというように考えて良いのでしょうか。
- 鈴木循環社会推進課長：今ある焼却施設の数を4施設から2施設にするのが今後、適当ではないかということです。個々についてはどうするか、今あるものを建て替えるのか、新しく作るのかということはこれからの個別の課題になると思います。



- 西海委員：更新と聞いたから亀田のあの辺にもう一個作るのだなというイメージは持っているのですが、2か所にした場合、おそらく処理をするエリアが広がります。ただ、処理能力から考えると、人口的なこともあって、2か所で新潟市プラスアルファをカバーできると理解しているのですが、それでよろしいかということが1点。また、2施設で処理をすることになると燃やすごみの週2回収ということが現実的に出てくるということで理解してよろしいですか。
- 鈴木循環社会推進課長：まず1点目の都市・人口規模でいきますと、先回でも紹介させていただきましたが、2施設ないしは3施設といった都市が多くございます。そして、収集回数ですが、改めて方針の中に設けるというよりも、検討しなければいけない課題として認識しております。施設を少なくしたから回数を変えようというのは、現在の段階では市としては、これからの考えられる課題としてはありますが、はっきり持っておりません。
- 山賀会長：ほかにご質問やご意見はありますか。
- 関谷委員：この考え方の根幹はよく分かっているつもりなのですが、今まで点在していた施設を集約化する中で起こる確実な問題は、収集車のいわゆる物流が増えてくるということです。要するにCO<sub>2</sub>が削減すると言いながら、逆に増えていくことが考えられる訳です。理念との整合性ということを考えてときに、ハードがこのように整備されるということからすると、同時にそれに対する対策も、当然考えなければいけないわけでそのあたりはいかがでしょうか。
- 鈴木循環社会推進課長：関谷委員のご指摘のとおり、収集車は施設が少なくなれば、運搬距離が伸びることは市としても考えております。するかないかは別なのですが、収集車自体が電気自動車やEV系の焼却施設で生んだエネルギーを使ってといったことも重ねて実行できるかどうか分かりませんが、考えていきたいと思っておりますし、その施設で減らせるCO<sub>2</sub>と、収集車の距離が伸びるということで生まれるCO<sub>2</sub>をしっかりと把握しながら、進めていきたいと思っております。
- 関谷委員：そこはぜひやりますと言っていたきたいです。そうでなければ、循環型社会というのが言葉遊びにしか聞こえなくなります。例えば、川崎市はEVの収集車を作って、バッテリーを実際にカートリッジみたいなものにして3分で交換できるとか、あるいは京都市の場合は、食品ロスの中で出てくる油をバイオディーゼルにして、バスなどのエネルギー源に使うエネルギーコストを削減するとか、それが一つのブランドになって、先ほど言ったSDGs的な一つの取組のモデルケースになります。ですから、そこはやはりやりますと言っていたきたいです。そうでなければ、どこが循環型社会かということになってしまおうと思っております。単純にこれだけで終わったら、言ってみれば市民に負担が増え、環境にリスクが出てきて、言葉は一応先進モデル都市みたいというようなことは、それはさすがによくないだろうということで、ぜひしっかりと検討いただきたいと思っております。
- 鈴木循環社会推進課長：ありがとうございます。検討いたします。
- 鈴木委員：1日あたり800トンの施設が必要とのことですが、2施設体制にした際の新田清掃センターと、プラス更新施設の470トンというのは、現在、新田清掃センターではどのくらい使っているかがよく分からないので教えてください。
- 鈴木循環社会推進課長：1日あたり330トンが新田清掃センターで最大処理できる量です。新田清掃センターを活かした場合800トンから、新田清掃センターの処理量1日あたり330トンを引くと、その差が470トン程度という話しです。
- 鈴木委員：つまり、ここに出てくる2029年度の年間21万5,000トンが余力を持って処理可能と

いう数字と考えるとよろしいのでしょうか。

- 鈴木循環社会推進課長:おっしゃるとおりです。単位といたしますか、左側の数字の年間 21 万 5,000 トンが年間の推定処理量で、右側にいきますと日になりますので、数字は違っていてもイコールです。

### 3. その他

- 山賀会長:以上で、審議事項は全て終了しました。これもちまして、本日の審議を終了します。